

1、「8月は、6日、9日、15日(にち)」とあって、原爆、太平洋戦争の犠牲者を追悼し、戦争の惨禍を検証し、特に日本のアジアにおける侵略戦争の加害者責任の継承を、歴史認識として鮮明にする時である。詩編130編が「われ深き淵より汝を呼べり」と呻吟するように、戦時犠牲の代償である立憲主義憲法がないがしろにされた、今の泥沼の日本の精神・思想状況で、神の語りかけに耳を澄ます日でもある。

2、イスラエル民族は歴史の節目で「僕聴く、主よ語り給え」と耳を澄ませた。この聖書の言葉の状況に眼を留めたい。当時イスラエルはペリシテという外敵に出会って、悩み、困惑した。結局力には力を、と制度的には王国を作って対抗した。しかし、サムエル記を残した申命記史家は外敵の強力さに先立って、問題は、内々にあるのだ、とその危機を指摘する。例えば、3・11以後の日本の危機は、この国の人々の価値観(政治、経済、文化の在り方、責任の取り方)だと指摘されるように。

3、「そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった」(3:1)。神との関係の、希薄さ、鈍さの指摘。「ある日、エリは自分の部屋で床に就いていた。彼は目がかすんできて、見えなくなっていた。」(2)。祭司エリの危機が描かれている。「息子たちが神を汚す行為をしていると知っていながら、とがめなかった罪のためにエリの家をとこしえに裁く。」(13)。

4、その神の裁きを聴きまた語る役目が、神殿でエリのもとで修行中の少年サムエルに課せられる。歴史の危機で、それを「聴く」役目が、少年とは。

主の神殿で、明け方、サムエルは三度自分を呼ぶ声を聞く。三度目に「どうぞお話ください。僕はきいています」といったという物語は有名な物語。

「しもべ」は礼拝の姿勢を含意する。神に聴くという事は、自分中心、自分本位の思惟体系が碎かれるという事に他ならない。本当に「聴く」ということは、自分を無し、自分が碎かれ、相対化されることだ。「主よ、お話ください」(9)とは、神を主語とするという「宗教的転換」の経験である。

5、サムエルは「師」エリへの神の裁きを聴いた。「サムエルはエリにこのお告げを伝えるのを恐れた」(15)とある。サムエルはエリの「お前に何が語られたのか。私に隠してはいけない。」という促しに支えられて、神の言葉を語るという最初の使命を果す。エリは晩年になって衰えたとはいえ、最後の使命として、神の裁きを受け止めるという、イスラエルの歴史にとって大変大事な、そして難しい役目を果す。イスラエル宗教の歴史の系譜にある人は、常に「神の裁きを聴く」役目を担う。

6、「歴史を生きる」者は、個人的にも、民族としても、神の裁きを聴く覚悟を怠ってはならない。それは、幼児サムエルへの追体験でもある。この夏、米映画監督オリバー・ストーンは広島で、ドイツ国家の「第二次世界大戦」への反省、検証、謝罪と比較して日本、そして安倍首相の広島発言の欺瞞と「国民」への覚醒の促しを語った。